

機械金属

大正時代は第一次世界大戦への参戦により、世界の舞台へ躍り出るとともに、近代化、工業化へと歩んだ時代でした。

当時の清水でも、大正 3 年（1914）巴川製紙、大正 6 年に鈴木商店精油所（後の豊年製油）、その翌年には黒崎窯業、富士水電ソーダ工業、大正 8 年三保造船、大正 12 年天竜製材、井手製紙と次々に工場が操業を開始しています。

大正 13 年（1924）清水は近接する 6 ヶ町村を合併して、全国で 101 番目の市となりましたが、その年の 8 月 10 日、親睦と技術の交換向上を目的とする任意組合「清水鉄工組合」が同志 13 名によって結成され、組合長に伊藤徳太郎が就任しました。

この組合設立当時、清水には 20～30 の鉄工関連業者がいましたが、多くは零細な業者で、ベルト掛けの旋盤その他工作機械と呼べるような設備を持っていませんでした。

当時の工場について、伊藤鉄工所の「経路」という本のなかに、

工場の設備機械は焼玉機関^{*}の製造に応じる程度に過ぎなかったので、新潟鉄工所の優秀な工作機械を見慣れていた自分には、この工場の機械が貧弱に見え、いつも物足りない気持ちでこのままにしておけない、何かいい工作機械を手に入れることが出来ないものか

と悩んでいたと記されています。これはちょうど先の組合設立の頃で、「何とかしなければ」という気持ちの対象は、工作機械のみならず事業あるいは業界に対して同様であったと考えられ、同様の考えを持ったものが集まって組合の設立が成ったと思われます。

昭和に入り、組合名の改称や戦時中の統制を受けるなど紆余曲折を繰り返しましたが、昭和 22 年（1947）5 月 12 日静岡県知事の設立許可を得て、組合員 97 名で「清水鉄工機械工業協同組合」の設立登記がなされ、法人としての第一歩を踏み出しました。

清水における機械金属業界は、清水港を中心に造船・製材等の関連部品や輸送・工作機械等を主に製造してきましたが、時代の変遷とともにその時々の社会や産業構造の変化・発展に伴い、製造する品物も変化して来ました。

現在は、部品加工、建設用金属、製缶（圧力容器）等の金属品製造、工作機械・産業用機械・冷凍機等の一般機械製造、自動車部品・鋼船製造等の輸送機械製造が中心となっているほか、宇宙開発関連などの最先端分野へも拡大してきています。

高度な加工技術を活かして特注品から量産品まで多種多様な金属製品を生み出して、全国に出荷するなど、地域の発展に貢献しています。

*焼玉機関（焼玉エンジン）

シリンダーヘッドに焼玉とよぶ鑄鉄製半球型の燃焼室があり、それが高温の点火源となる燃焼噴射機関。取扱いが容易なため小型漁船に使われたが、燃料効率が悪いことと始動に手間がかかったためディーゼル機関にとって替られた。